

「沖縄から大きな声を」

ハルペリン氏 普天間打開へ提案

「基地の島」シンポ

沖縄返還交渉に携わったモートン・ハルペリンさんを招き、那覇市泉崎の琉球新報ホールで18日に開いたシンポジウム「基地の島、沖縄の今を考える」(主催・新外交イニシアティブ、琉球新報社)には650人が詰め掛け、会場は熱気にあふれた。ハルペリンさんは個別具体の問題を一つ一つ検証し、切り崩していったという辺野古打開の糸口になるような沖縄返還交渉の舞台裏を振り返った。



650人が訪れてモートン・ハルペリンさんの話に聞き入ったシンポジウム18日、那覇市泉崎の琉球新報ホール

基地反対の県民感情を理解しない日本政府を批判、米国の一般国民の注意を引くよう「沖縄から大きな声を上げ続けることが大切だ」とエールを送った。

パネル討論には元知事の大田昌秀さん、沖縄国際大学教授の佐藤学教授も参加した。大田さんは学徒動員された沖縄戦を振り返り、辺野古新基地建設が強行される現状に「140万県民の住む沖縄は無人島ではない。日本に民主主義はない」と憤った。

返還交渉の中で、ベトナム戦争進行中の米軍を説得するという困難な折衝でハルペリンさんが大事にしたのは、個別具体の細かい議論と検討だったという。返

還後の機能維持、核兵器撤退などに対する米軍の懸念を解消し、かたくなな姿勢を軟化させて返還を実現した。佐藤教授は「日本政府はこのような作業を一切しなかつた。返還交渉の

教訓を普天間問題解決の教訓とすべきだ」と語った。復帰前、ある米軍人が、沖縄は米軍が犠牲を払って手に入れたとの認識の下で「島の全てが基地の中にある」とまで言っていたというハルペリンさんの説明に、奥間美江子さん(65)「那覇市」は「初めて聞いた。だから今でもやりたい放題なのか」と驚いた。中国雲南省から横浜国立大学に留学中の王建成さん(23)は「沖縄が本場に日本の一部なのであれば、どうして日本政府は沖縄の人々の気持ちを完全に無視できているのか」と首をかしげた。

東京の大学に通う与那嶺宏喜さん(21)は、「若者もお年寄りもさまざまな視点で物事を見て、どのような意見を持つか考えるべきだ」と話した。大田さんの話に心打たれたという玉城洋子さん(68)「北谷町」は「現在も次の世代の平和のためにも、一人一人が沖縄の状況に関心を持ち、行動を起こしていくべきだ」と話した。